

**2018 年西日本豪雨災害被災地における
学生ボランティア活動
活動報告書**

活動場所：広島県三原市災害ボランティアセンター

活動期間：2018 年 8 月 13 日～10 月 1 日

活動者数：埼玉県立大学 学部生 13 人

2018 年 11 月 28 日

活動報告会資料

西日本豪雨災害被災地における学生ボランティア活動
活動報告書

目次

学生報告資料	1
支援教員報告資料	6
参加学生の感想	11
学生による災害福祉支援活動の展開と今後の課題	29

広島県三原市災害ボランティアセンター支援 学生プロジェクト

活動報告会

活動学生: 大岩駿介・難波美希・齋藤夏美・矢板千紗都・
赤羽未咲・浅野優香・加藤彩結・小出帆夏・佐藤洸希・
細井由沙・本間駿作・竹澤玲江・鶴田千尋

三原市の概要

広島県中央東部に位置

面積: 471km² (広島県の5.6%を占める)

人口: 94,809人、43,721世帯

(平成30年7月30日時点)

気候: 温暖、多照少雨の瀬戸内式気候区

年間降水量: 南部約1,200mm、北部約1,300mm



(広島県地図)

平成30年7月豪雨について

平成30年6月28日から7月8日にかけて、
西日本を中心に全国的に広い範囲で記録された
台風7号及び梅雨前線等の影響による集中豪雨が発生。
同年7月9日に気象庁が「平成30年7月豪雨」と命名。



6月28日から7月8日までの総降水量が
四国地方で1,800mm、東海地方で1,200mmを超えるところがあるなど
7月の月間降水量平年値の2~4倍となる大雨となった。(気象庁HPより)

参加学生日程

8月13日から10月1日にかけて、埼玉県立大学学生13人が
約1週間交代で活動。

最低限の引継ぎは学生間で行い、スケジュールの穴は岩手
県立大学の学生と協力して補った。



8月12日	8月13日	8月14日	8月15日	8月16日	8月17日	8月18日
	大岩in	大岩	大岩	大岩	大岩	大岩
8月19日	8月20日	8月21日	8月22日	8月23日	8月24日	8月25日
大岩out? 矢板in	矢板	矢板	矢板	矢板 (岩手5in)	矢板out? (岩手5)	(岩手5)
8月26日	8月27日	8月28日	8月29日	8月30日	8月31日	9月1日
(岩手5)	(岩手5)	本間in 竹澤in (岩手5)	本間 竹澤 (岩手5)	本間 竹澤 (岩手5)	本間 竹澤 (岩手5out)	本間 竹澤 (岩手5)
8月2日	8月3日	8月4日	8月5日	8月6日	8月7日	8月8日
本間 竹澤 (岩手5)	本間 竹澤 (岩手5)	本間out 竹澤out 齊藤in	齊藤 難波	齊藤 難波	齊藤 難波	齊藤 難波
8月9日	8月10日	8月11日	8月12日	8月13日	8月14日	8月15日
齊藤 難波 (岩手5in)	齊藤 難波 (岩手5)	齊藤 難波 (岩手5)	齊藤 難波 (岩手5)	齊藤 難波 (岩手5)	(岩手5)	(岩手5)
8月16日	8月17日	8月18日	8月19日	8月20日	8月21日	8月22日
赤羽in (岩手5)	赤羽 細井 (岩手5)	赤羽 細井 (岩手5)	赤羽 細井 (岩手5)	赤羽 細井 (岩手5)	赤羽 細井 加藤 (岩手5out)	赤羽 細井 加藤
8月23日	8月24日	8月25日	8月26日	8月27日	8月28日	8月29日
細井out 細井 加藤 小出in	細井out 細井 加藤 小出 佐藤	細井out 細井 加藤 小出 佐藤	細井out 細井 加藤 小出 佐藤	細井out 細井 加藤 小出 佐藤	細井out 細井 加藤 小出 佐藤	佐藤
8月30日	10月1日					
佐藤	佐藤out					

被災状況について



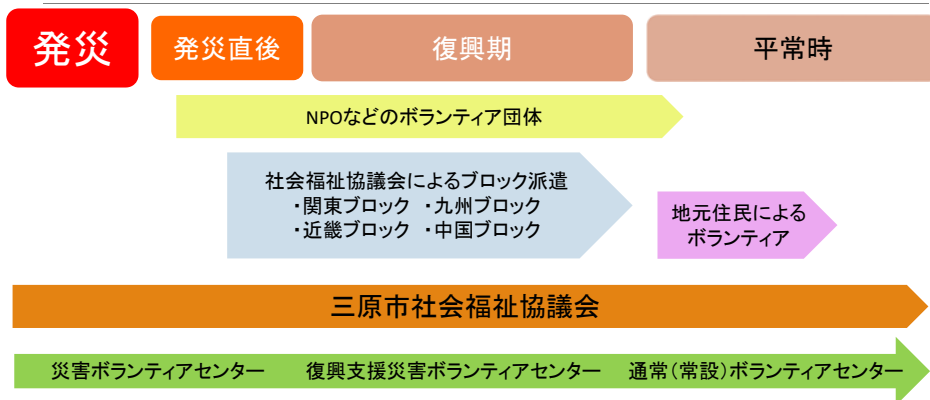
大雨による浸水被害の様子

被災状況について



大雨による土砂崩れ被害の様子(福地サテライト付近)

災害時のボランティアセンターの発足の過程



災害時のボランティアセンターの役割

総務班

…センター運営・連絡調整・情報発信・資金管理など

ボランティア受付班

…ボランティアの受付・問い合わせ対応など

ニーズ・マッチング班

…ニーズの把握・現地調査・活動当日のオリエンテーリングなど

資材班

…資機材の貸し出し・管理など

送迎班

…ボランティアに来た方を活動場所まで送迎・車両の手配など



ボランティアセンターの1日

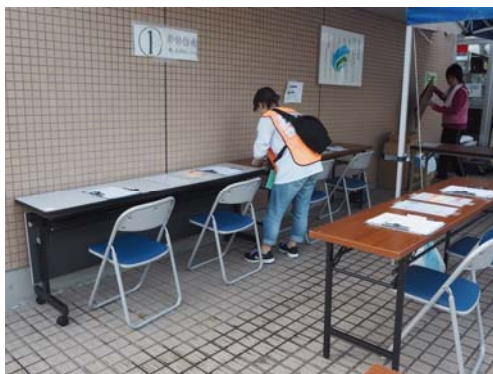
- 8:00 朝のミーティング開始
- 8:30 ボランティア希望者受付準備、ローラー活動開始
- 9:00 ボランティア受付開始、活動班活動開始
- 10:00 ボランティア帰着後のタオル・飲み物の用意、チラシ作り
- 11:30 ボランティア受付終了、受付片付け
- 12:00 昼休憩
- 13:00 必要資料抜き取り、データ入力など
- 15:00 ボランティア活動終了、帰着次第迎え入れ
- 16:30 洗濯物干し、夕方のミーティング



朝・夕のミーティング



ボランティア受付



現地での活動



ローラー活動



チラシ折り込み



マッピング・データ入力



掃除・洗濯・環境整備



感想・総括



広島県三原市災害ボランティアセンター
運営支援学生プロジェクト
～実施の経緯と概要～

埼玉県立大学保健医療福祉学部
社会福祉子ども学科 新井利民

「災害福祉支援活動の組織化」の重要性

組織化により活動内容・人数・時間があらかじめ告知されていれば…

- ◆「活動受け入れ側」のメリット
 - ・活動量や時間をある程度想定できる
 - ・一定の統率も取れる
 - ⇒様々な調整コストの軽減も図ることができる。
 - ◆「活動実施側」のメリット
 - ・知識やノウハウの交換や蓄積が可能
 - ・効果的な活動を行っている実感が得やすい
 - ・メンタルヘルスへの配慮
- ⇒「現場」の活動でも、VC運営支援でも同様

これまでの本学学生による支援活動

- ◆2004年：平成16年7月新潟・福島豪雨
 - ・7/24～25本学学生3名と立正大・大東文化大の学生を連れ三条市ボランティアセンターにて運営支援
- ◆2011年：東日本大震災：さいたまスーパーアリーナ
 - ・3月17日より現地調整・学生募集。登録学生77名。
 - ・3/20～31の期間、延べ約200人が生活支援活動。
 - 保育（屋内外での保育、散歩や遊び支援、図書館の運営、迷子の確認）、
 - 相談支援（社会福祉士会等と共に健康・生活相談の聞き取り補助）、
 - ゴミの回収、救援物資や避難者の荷物の仕分けなど。



2004年

平成16年7月新潟・福島豪雨
新潟県三条市社会福祉協議会
ボランティアセンターにて
運営支援



参加学生のコメント

新潟の状況をニュースで見ている「何か力になりたいけど、どうしよう、どうしよう・・・」と悩んでいた私が**一歩を踏み出せたのは、先生が声をかけてくださった**おかげだと思っています。

他大学の学生に知り合って色々な話を聞いたことも「同じ学生でこんなに明確な意思を持って活動している人がいるんだ・・・。」と驚き、**自分のあり方についても考えるよい機会**になりました。

活動自体にしても、「同じことに心を動かし、同じ目標に向かおうとしている人がこんなにたくさんいる」ということに、ただ単純に感動したというか・・・、それってとてもすごいことだと思いました（語彙が貧弱ですみません・・・。）

「よい経験になりました」というと被災された方に悪いのですが、きっと**今後の私の生き方に影響を与える**と思います。



東日本大震災
さいたまスーパーアリーナ
2011年3月19日午後
バス約70台で
1,200名が避難





物資持参者やボランティアが 3,000名以上訪れる

「被災者避難のさいたま、ボランティア3000人 待機の人も」(2011.3.23 日経電子版)



学生による朝のミーティング

参加学生の感想とその後

- 私には地域が被災したことで、多くの方々が私にも活動の機会を考えた。保育班で子供たちが泣いて声を出して、大切なものを壊した。中にはお母さんが泣き出したり、子供が泣いて、自分の無力感を感じました。
- 今回のボランティア活動で、さいたま市の方々と知り合いになりました。



参加学生の一人は、これを契機に復興支援サークルを結成し、助成金を獲得してボランティアバス運行や広域避難者のサロン運営支援を行うなど活躍。

後輩に引き継がれている。

埼玉新聞 2018.3.15



これまでの本学学生による支援活動

- ◆2015年：平成27年9月関東・東北豪雨
9月16日：学生2人と常総市災害VC運営支援
9月22日：本学社福・看護・OTの学生および
国土舘大学の学生計7名と泥出しなどの活動



撮影 新井利民

これまでの本学学生による支援

◆2016年：熊本地震

- 5月1～4日：支援Pと同行し状況把握、関係形成
- 支援Pが西原村社協・VCスタッフ（ピースボート）と学生受け入れ・宿泊先調整。
- 7～8月：学内の助成金制度創設を働きかけるも頓挫。寄付を募る（1人2万円の助成）。
- 9月13～30日：7名（社福4名、看護3名）の学生が交代で西原村災害VCにて支援活動。最初の3日間は新井も同行。
- 11月21日：活動報告会を開催。学内外から参加者あり。



平成30年7月豪雨の学生活動支援

◆7月9日：学内メールで活動者を募集

◆7月23日：被災地支援の全国組織などと情報共有をスタート

◆7月27日：ボランティア活動支援サークルの幹部学生にサークル活動とすることを提案。

⇒最終的に13名の学生（社会福祉11名・看護2名／男性3名・女性10名）が登録。



平成30年7月豪雨の学生活動支援

◆8月2～6日：広島県三原市社協に派遣された支援Pに、学生活動受け入れの可能性を打診してもらう。「ボラサポ」申請書の準備。

◆8月7～11日：現地へ赴き、自ら災害VCの運営支援活動を行うとともに、最終的な学生活動スケジュールの提示と活動内容の確認、宿泊先や入浴場所の確認と調整。

◆8月13～10月1日：13名の学生（社福11・看護2／男性3・女性10）が約1週間交代で活動。事前オリエンテーションを複数回実施。

◆8月16日：岩手県立大学学生グループとのコラボ：活動日程に「穴」があったが、すべての日程が埋まり、学生間で最低限の引継ぎが可能に。

平成30年7月豪雨の学生生活活動支援 活動校の広がり

◆長野大学

- ・長野県社協⇒支援P⇒三原市社協へ、参加の打診・宿泊先の検討の相談。
- ・9月11～14日、9月21～24日の日程で、活動を行う。

◆県立広島大学

- ・社会福祉士実習の一環で災害VCで埼玉・岩手の学生とともに活動。
- ・学生生活の様子について、三原市社協を介して県立広島大学教員に情報提供。
- ・9月下旬より週末に学生サークルがVC運営支援を実施することとなる。

三原市災害VCで活動した学生数 (延人数・除く県立広島大)

	埼玉 延人数	岩手 延人数	長野 延人数	学生 延人数計
1週目8/13～	6			6
2週目8/19～	7	12		19
3週目8/26～	15	30		45
4週目9/2～	19			19
5週目9/9～	11	33	16	60
6週目9/16～	14	34	10	58
7週目9/23～	18		10	28
8週目9/30～	2			2
合計	92	109	36	237

生活面での学生の
問い合わせで現地
スタッフに迷惑を
かけないよう、マ
ニュアルを整備し
オリエンテーショ
ンを実施



災害福祉支援学生生活活動の意義

<被災者にとって>

- ・遠く離れた地域から支援に来た若者に、勇気づけられたり、見守られている感覚に。
- ・若者へ「教えてあげよう」「伝えてあげよう」という感覚が、被災者の口を開くきっかけに。

<職員にとって>

- ・若者とともに活動することによる「活力」。
- ・マンパワーとなってくれば、職員も休息をとることができる。
- ・ニーズの捉え方、援助の考え方、大変なことや愚痴も含め学生に伝えることにより、自分の実践を振り返る場に。

<学生にとって>

- ・被災地の実情、支援の在り方、ニーズとは何か、コミュニケーションの取り方、コーディネーション、ミッションを持つことの大切さ、協働

……などの「力」や「考え方」の獲得

【参加学生の感想】

三原市災害ボランティアセンターでの活動に参加して

社会福祉子ども学科社会福祉学専攻1年 竹澤 玲江

9日間、広島県の三原町に災害ボランティアに行きました。私は被災地に行ったことがなくて最初は不安しかありませんでしたがボラセンの方々や、現地の方がとても温かくて優しく迎え入れてくださったので安心して活動することができました。被災地を実際に見たり、写真をみせていただいたりしてこんなにも大きな大変な災害が起きたんだと改めて感じました。また、現地の方々の被害状況をヒアリングしたりお話ししたりすることで災害の怖さを痛感しました。埼玉から来たと伝えるとありがとうねと泣いてくださる方がいたり、ボランティアさんにとっても感謝していると伝えてくださる方がたくさんいてボランティアさんの存在がどれだけ大きいものかを感じることができました。

今回ボラセンの運営という立場でボランティアさせていただいて、ボランティアさんのサポートができてよかったと思っています。災害が起こってから2ヶ月くらいが経とうとしているのにも関わらずまだまだ元どおりの生活をするのが困難なお宅もあり、復興はまだまだできてないし元に戻るのには難しいんだと思いました。今回ボランティアセンターの運営をするにあたってボランティアさんの支えに少しでもなれば良いなと思い活動しました。実際に現地に行くことはほぼありませんでしたが少しでも現地の方々の力になりたいと常に考えて行動しました。正直慣れない場所での活動はしんどいと思うことが何度もありましたが、たくさん楽しく優しい方々に支えられてなんとか乗り切ることができました。ここに来なければ見れなかった景色があって、ここに来なければ出会えなかった人がたくさんいるので1つ1つを大切にしていきたいと思いました。なかなかこのような貴重な体験はできないので今回学んだたくさんのことを忘れずに、復興はまだまだだということをしつかりとここに来れなかった人に伝えていくことが実際に現地に行った私たちの使命だと思っています。

災害は絶対に起きてほしくないけれど、万が一またこのような災害があった時には絶対にボランティアしたいと思いました。また、今回参加したボランティアの人数は本当に少ないと思ったので災害ボランティアの大切さをもっとみんなに知らせていきたいと思います。夏休みになにか大きなことがしたいと思って参加したボランティアでしたがとても濃い時間を過ごすことができました。ボラセンの職員の方々、一緒にボラセンの運営をした社協の方々、9日間という長い期間、親切に部屋を貸してくださった方にとっても感謝しています。ありがとうございました。

三原市災害ボランティアセンターでの活動に参加して

社会福祉子ども学科社会福祉学専攻1年 鶴田 千尋

私は8月28日から9月5日までの9日間、三原市災害ボランティアセンターで運営側としてボランティアに参加しました。よくスタッフの方に参加したきっかけを聞かれましたが私には参加したきっかけは明確にはありませんでした。少しでも自分の行動が被災した方の力になれば良いと思うだけでした。社会福祉学専攻の中で現在学んでいますがそこでもあまり具体的な目標などは無く、かなり災害ボランティアは興味がある方でした。

まず、初日から住民の方の家に訪問し現在の状況やニーズを聞きに行かせて頂きました。そこで感じた事は災害から2ヶ月ほど経っていたので想像よりかは交通の面は良かったです。しかし、浸水の影響でどの家も家の一階部分は家具が全て無く水の形跡が残っていたため心が痛かったです。実際に住民の方のお話を聞くと、まさかこうなると思っていなかったという言葉が多く聞きました。今までこのような災害が起こっていないため、誰も予想は出来ないし、どう避難したり行動するのもさらに分からないと感じました。さらにほとんどが高齢者のため移動も難しそうでした。たくさんのお話を聞きましたが本当にボランティアさんがいなかったら今みたいに暮らせていないと言ってくださる方もいて、直接携わってはいませんが来てよかったと感じました。また、家を訪問する際に手書きメッセージ付きのチラシを渡していました。そのチラシは災害の対応の仕方やボランティアセンターについてのものでした。情報源が少ない中、一軒一軒渡していく大切さを知りました。メッセージはやはり手書きにすることで身近な物として捉えることが出来るし人の温かさを感じることが出来るものだと思います。

今回は運営側として、9日間受付や現地確認、ニーズの掘り起こし、メッセージ付きのチラシ作りをメインに活動しました。災害ボランティア自体が初めてでしかも広島県で不安でいっぱいでした。正直、思っていたより大変でした。朝も早く寝袋で寝ることも慣れていなかったからです。ボランティアに行くにあたり、参加したいと思う人はきっと多いと思います。でも何を準備しどこに泊り、どのくらいの予算がいるのかが分からないことが参加できない原因だと思いました。かなり準備も大変だと個人的に感じました。しかし、辛いことよりも断然学ぶ事の方が多かったです。行かなければ分からない現状を見て知る事も出来たり、現地のスタッフさんや住民の方とたくさんお話ができたり多くの出会いがありました。

災害ボランティアについてもっと知りたいと思うこともあり、今回学んだことを活かしてまた参加したいと強く思いました。運営側はもちろん、普通のボランティアの身としても参加してみたいです。違う視点から学べると思っています。まだまだ、ボランティアの人が足りなかったり、ニーズが多い現状ですが少しでも力になれば嬉しいです。少しでも早い復興を願っています。とても充実した9日間でした。

三原市災害ボランティアセンターでの活動に参加して

社会福祉子ども学科 社会福祉学専攻2年 本間駿作

私は今回初めての災害支援を行いました。はじめに想像していた現場に出て泥の運搬や床板はがしをすることがメインではなく、災害ボランティアセンターの支援をすることでした。被災の経験や災害ボランティアの経験をしたことがなく、未経験の自分にできることはあるのかと不安を抱えていましたが、三原市社会福祉協議会の方々やボランティアに来てくれている地元の人たちと話していくうちに自分でもできることがあるなど実感することができ、不安もなくなり充実した活動を行うことができました。

今回災害ボランティアの活動に参加して、全国の様々な人の「少しでも被災地の人の力になりたい」という思いを感じることができました。ボランティアセンターの受付をしていると地元の人はもちろん、全国各地からボランティアに来ていて被災地の人のために何かをしたいという思いを多くの人から感じ暖かい気持ちになりました。また、そのような人たちの活動や寄付などを効率よく集約し、効率よく支援の手が差し伸べられるよう運営を行っているボランティアセンターの役割を学ぶことができました。ボランティアセンターの業務には受付やオリエンテーション、マッチング、資材、ニーズ受付、ニーズ掘り起しなど様々なものがあり私は今回の活動で一通りの業務に携わることができとても勉強になりました。また現場に出て床板はがしの経験もできてよかったです。ニーズ掘り起しでは、地域の家を一軒一軒訪問するローラーを行いました。こういったアウトリーチをすることで自発的に助けを求められない、もしくはボランティアセンターが手伝いをしていることを知らなかった人に対して支援をできることを伝え、新たなニーズを発見することに繋がったのでやりがいを感じました。また、ローラーでは地域の方々と話ず機会が多くその際に埼玉から来てくれていることに感謝をされることが多くうれしかったです。

今回の活動で災害ボランティアとは床板はがしなどの大掛かりな作業だけではなく、避難所の清掃や支援物資の受け入れ・仕分け、地元イベントへの参加・手伝いなど体力や経験がなくても参加できるものがあり、年齢や性別に関係なく、自分のことから支援をしていくことが大切であると感じました。その地域に住む多くの方が関わり、支えあうことでボランティアセンターが成り立ち、プラスして他県からのボランティアや学生が加わることでより濃い支援を行えたと思います。

宿を貸してくださった方、裏で様々な手続きをしてくださった方、現場で教えてくれた方など多くの方の支えがあつてこそ今回のような活動ができたと思います。今回の経験を生かして今後のボランティア活動や進路決定などに役立てていきたいです。

三原市災害ボランティアセンターでの活動に参加して

社会福祉子ども学科 社会福祉学専攻 2年 浅野優香

私は9月7日から13日までの7日間、活動に参加しました。ボランティアセンターでは、主にニーズ掘り起し班として活動することが多かったです。ニーズ掘り起し班では一軒一軒お宅を訪問し、何か困っていることはないかをヒアリングを行いました。ヒアリングを行った地区は比較的被害が少なかったところが多かったため、現在困っているという世帯は少なかったですが、当時の様子などを聞くと直接被害がなくても断水や停電などの被害がありとても大変だったということでした。当時のことがトラウマになっており、雨が降ると怖くて眠ることができないことがあるとおっしゃっている方もいたため、床下の泥出しなどのケアだけではなくて、家が片付いた後も心のケアなどを行っていく必要があると感じました。

最初は社協の方の後ろに立っているだけで何もできませんでしたが、何件もお宅を訪問していくうちにだんだんと自分も質問をしたり、お話を一緒にすることができました。社協の方と一緒に訪問を行っていたため、訪問して最初にどうやって話を切り出すか、どのタイミングで質問をすればいいかなどを訪問の様子を見て学ぶことができました。また、ヒアリングの中で、「ボランティアセンターに相談してボランティアが手伝いに来てくれたことが嬉しかったし、本当に助かった。」と言っていて、ボランティアセンターの仕事の重要性などに気づきました。

ローラーを行う中で、一回だけ社協の方と一緒にではなく一人でヒアリングを行うことができました。一人でしっかり対応できるか不安でしたが、一緒にヒアリングを行った時のことを思い出しながらなんとか一人で行うことができました。この経験はなかなかすることができないし、将来、どの職種に就くとしても必要になってくるものだと思うので、貴重でいい経験ができたと思います。最終日には、一緒に訪問をしていた社協の方に「話聞くの上手だね。社協に向いてるよ！」と言っただけのようになりました。このことで自分に自信を持つことができたし、これからの勉強も頑張ろうとやる気になりました。

今回、このボランティアに参加して、将来についてとても考えさせられました。私は、本当のことをいうと高校の時からすごい福祉をやりたいくてこの大学を受験したわけではありませんでした。大学に入ってから福祉を学ぼうというやる気はありましたが、将来どの分野に進むかなどはまだ考えていませんでした。しかし、周りの人たちはやりたいことが、「自分も何か見つけないと」と内心焦っていました。しかし、今回のボランティアで社協の方たちと地域をまわったことで、地域に関わる仕事の重要さなどを感じそういった分野への興味がわきました。まだ、地域の分野に進もうと決めたわけではありませんが、この経験は自分の中で何かおきなターニングポイントのようなものになったのではないかなと思っています。これをきっかけに将来のことについてもっとよく考えていこうと思いました。

三原市災害ボランティアセンターでの活動に参加して

看護学科 2年 齋藤 夏美

今回、私は9月5日から11日までの7日間、広島県三原市災害ボランティアセンター運営支援事業の活動をさせていただいた。新井先生、および所属しているサークルであるSolutionsからこの活動の呼びかけがあり、参加することを決めた。テレビで放送されている西日本豪雨災害の様子をみて、私にできることをしたいと思ったため、また、将来医療福祉分野に携わろうとしている身として、現場から学びたいという思いがあったためである。

実際に三原市を訪れてみると、想像以上に普段の暮らしとは離れた景色があった。川岸や家の前に積まれた土嚢、家の裏山に掛けられているブルーシート、一見被害のないように見える家でも、中はがらんどうの状態。電車も運転を見合わせている状態で、代替バスを使って移動する人々。発災から2ヶ月が経とうとしていても、まだまだすべきことは多くあるということがわかった。

ボランティアセンターでは、ボランティア受付対応、一軒ずつ訪問しての個別調査、そのヒアリングシートを地域毎にデータ化する作業、ボランティア依頼者のお宅の現場確認等をさせていただいた。地域の方々から被災状況について多くのお話をうかがい、データ入力を通して、被害の様子とニーズを知ることができた。この地域は台風の影響を案外受けないからと油断していたという地域の声を聞き、それゆえに受けたショックも大きかったであろうと思った。ろう者の方は放送が聞こえず、給水のタイミングが分からず困っていたという声もあった。人の流れにのって、行く先も目的も分からずついて行って無事に入手したそうで、そのときの不安は計り知れない。ある方は、雨が降ると不安で眠れなくなるとおっしゃっていた。実際にうつやPTSDになっている方もいらっしやった。今の私には話を聴くことしかできず、もどかしかった。そんな地域の方が抱える不安に対処するべくボランティアセンターの職員の方々が対処しているのが本当に素晴らしいと思った。ボランティアセンターには保健師・弁護士相談や乳児診療、ペットについて、自動車被害への対応についての案内等、多くのチラシが張り出されていた。アレルギー対応の食品も置いてあった。ニーズを解決するためにできることを調べ、意見を交換し、実行していく過程も拝見することができた。私には多角的な視点がないことを実感した。このセンターの目標は「住民がふだんの暮らしを取り戻すまで寄り添う」ことである。長く支援を続けるためにはきちんとした仕組みづくりが大切である。その上でできることを少しずつ行うのである。してもらいたい、してあげたいという思いのままに行動するのでは一時的な満足、または不公平な対応になりかねない。信頼関係を大事にし、この先も共に暮らしていくことが社会福祉協議会として重要なのだと知った。

私が最も印象に残っていることは現場確認させていただいたことである。そのお宅のご主人は泥の拭き取りや床下の泥の撤去を依頼されていた。とても大きく、きれいで、立派

な日本家屋であった。家の中には浸水してしまった多くの写真が干されていた。依頼者にお話をうかがうと依頼するかどうか迷っていらした。汚水が建物内部に侵入すれば建物の耐久性が失われるだけでなく、細菌の温床となってしまう感染症を引き起こすおそれもある。依頼者は家族のことを思って取り壊そうと考えていた。壊してしまう家の掃除をボランティアの方に頼むのは心苦しいとのことだった。私には解決策は何も浮かばなかったし、かける言葉も見つからなかった。帰りの車内で職員の方は、あのままの状態だと依頼者の方も前に進めないのではないかと、との考えを話してくださった。きれいにすることも必要だ、と。地域の方の言葉をそのまま受け取ることも、その真意を考えることもどちらも大事だと思った。最終的に決断するのは依頼者である。そのために必要な材料の提供をしたり、相談相手になったり、寄り添う存在になろうとしているのがわかった。その姿こそ、私が目標としたい姿であった。看護を学ぶものとして、その姿を間近で見ることができたのは本当に良い経験となった。今はまだもどかしさや歯がゆさを強く感じてしまう私であるが、いつかは押し付ける優しさではなく本当の思いやりをもって接することのできる人になりたいと強く思った。

埼玉に戻ってきても、ふとしたときに支援について考える。考えても考えてもつきないことではあるが、これからも考えることを続けていきたい。起こってはほしくないが、災害が発生したときのためにできることを増やしていきたい。看護者として、1人の人間としてできることは何か。未来に発生する災害だけでなく、継続して被災地に貢献できることもしていきたい。こうして考えるきっかけができたことは幸運なことだと思う。看護だからジャンルが違う、と参加をためらったときもあったが参加して良かった。

最後になりましたが、企画・活動環境調整していただいた新井先生や、環境を整え受け入れてくださった広島県三原市社会福祉協議会の方々、活動支援をしてくださった全ての方に深くお礼申し上げます。ありがとうございました。

三原市災害ボランティアセンターでの活動に参加して

社会福祉子ども学科社会福祉学専攻 3年 難波美希

1. はじめに

9月5日から9月11日までの7日間、三原市災害ボランティアセンターで活動させていただいた。活動前は、自分にできることがあれば何かしたいと思う一方で、自分が力になれるのかという不安も感じていた。活動を終えた今でも、自分自身が力になれたのか不安を感じている。活動を通して多くのことを感じ、学ぶことができ、大変貴重な経験ができた。

2. 活動を通して

ボランティアセンターの活動では、ボランティアの受け付け・帰着時の対応、ローラーフォロー、ローラー、データ入力・整理などを行った。ボランティアの受け入れを担当した際には、継続的に参加されている方、初めて参加される方、複数の地域を回って活動されている方など様々な地域から多くの方が参加してきているのだなと感じた。帰着時対応では、笑顔で対応することを心がけた。笑顔でボランティアさんに「お疲れ様です。」と伝えると、その日に行ってきた活動について教えていただけることも多くあり、現場・現状を知らなかった自分にとっては現状について知ることができる機会でもあった。また、地元のボランティアさんからは、三原市の地域についても多く教えていただき、三原市についても知ることができた。初日にボランティアさんが泥まみれで疲れて帰ってくる様子を見たことから、二日目以降は、帰着時の準備を行う際にボランティアさんのことを考えながら丁寧に準備を行い、少しでもボランティアさんの力になれるように心がけた。

ボランティアセンター内では、ヒアリングシートのデータ入力や未着手・未完了のデータ抜き出し、マップ整理などを行った。地味に見える仕事だが、その都度整理しておくことでニーズの早期発見、対応につながっていくと感じた。また、データの整理を行いながら、災害発生からすぐのボランティアセンターはニーズが多く、ニーズすべてを把握し対応することやボランティアセンター運営の仕組みを構築することが難しい部分が多くあるのではないかと感じた。そのため、のちに改めてデータを整理する必要性が生まれるなど、ボランティアセンターを運営していく上での難しさを感じた。データを整理していく中で、どの地域で被害がひどかったのか、現在どこまで片付いているのかをある程度把握することができた。まだ、片付いていないところや被害のニーズだけでなく生活上のニーズなども多く上がってきており、被害の大きさや長期的な支援の必要性を感じることができた。

4日目にローラーの実施後のフォローとして実際に被害に遭われた地域に同行した。実際に地域に出ると、土砂が残っている部分や破損している部分など被害の現状を自分の目で見て感じ、知ることができた。ヒアリングにおいて、スタッフの方の聞き出し方は、

「特定して」「特別に」という雰囲気ではなく、自然で相手に不信感などを与えることのない雰囲気であり、話しやすい相談しやすい雰囲気であると感じた。災害時には忘れてしまいそうだが、特別感ではなく、自然で話しやすい雰囲気をつくるというのはヒアリングにおいてとても重要なことであると感じた。6日目には、ローラーにでて、実際にヒアリングを行わせていただいた。ヒアリングする際には、スタッフの聞き出し方を思い出し、相手が嫌な思いをしないように話しやすい雰囲気づくりを心掛けた。質問項目をただ質問するのではなく、自分が学生スタッフであること、同行させていただいたスタッフ全員が県外であることを活用して話を広げ、「会話」から情報を得ることができたように思える。ヒアリングは強い拒否を受けるのではないかという不安があり、大変緊張した。ローラーは直接状況を知れたり、話を聞けたりする貴重な機会であると感じた。しかし、ローラーすることによって住民に「伝えたから、何かしてくれるのでは。行動を起こしてくれるのでは。」と思わせてしまい、何も変わらなかったり、すぐに変わらなかったりした際に住民が不満を感じたり、住民からの信頼を失ってしまったりする危険性もあるのだということを知った。住民にそう感じさせないようなアプローチの仕方、どこまでローラーを行うのかの線引きの難しさなどを感じ、考えさせられた。

3. おわりに

この活動を通して、改めて災害について考えさせられ、実際に災害にあわれた方々の気持ちを知ることができた。テレビ等での報道が少なくなり災害と無縁の人たちには忘れ去られてしまうような気もするが、実際に活動させていただいた者として自分はこの災害をずっと忘れないでいようとする。また、社会福祉士を目指すものとして支援の仕方や地域に寄り添う力など、今後社会に出て働く際に大切なことを多く学ぶことができた。ボランティアセンターのスタッフの皆さんのように地域の人が話しかけやすい、地域を思う心を忘れない社会福祉士になりたいと考える。三原市災害ボランティアセンターで活動することができ、大変良かったと思う。

三原市災害ボランティアセンターでの活動に参加して

社会福祉子ども学科社会福祉学専攻 2年 赤羽未咲

私は今回初めて災害ボランティアというものに参加した。この一週間で学んだこと、思ったこと、感じたことは本当にとっても多くてうまくまとめられないが、伝えたいことをまとめていこうと思う。

私がこのボランティアに参加した第一の理由は、テレビを通してではなく、自分の目で被災地を知りたいと思ったからだ。私は幸いなことに今まで大きな災害に出くわしたことがなく、日本で頻繁に起こる災害も口ではかわいそうとか言っていたが、どこか他人事のように取れえていた気がする。テレビで知ることが被災地のすべてなのか、災害から月日がたった被災地は報道も少なくなったが今の状況はどのようなものなのか、など知るために私は広島に向かうことにした。この目標はおおいに達成された。広島ではVCの拠点地で水害が主の本郷、特に水害がひどかった奥船木の集落、土砂災害が主の上北方や福地サテライトなど三原市を広範囲で見学させていただいた。災害から二か月たった今も、出かけて見渡せば家の一階がぽっかりと空洞になっている家、土のおいがこびりついた建物、いまだ手付かずの建物、人気も音もしない集落、まるで人が住んでいたことを否定するようにごっそりと家がなくなった跡など災害のすさまじさを表すものばかり残っていた。中にはテレビで見たことあるような光景もあったが、テレビで見た時に出た「やばい」という感想は直接見た時の私の口からは出なかった。何も言葉が出ず、ただ眼が離せず、言葉にできない感情ばかりが溢れて涙を堪えるのに必死な場面もいくつかあった。自分の目から伝わる恐怖でやっと、本当に起こったことだと実感した。テレビだけではすべての被災地は知れないし、その場で感じる土のおいや不気味な静けさ、人気のなさも知ることができない。また、取り壊されている途中の壁がはがされた家から見える今まで使っていたのであろうコップや歯ブラシが掛かった洗面台から漂う物悲しさにも気づくことはなかつたろう。

災害は誰のせいでもない理不尽なものだ。土砂災害が酷かった福地サテライトも見ていたら、被害がひどかった坂道一本があり、その一つ隣の道はなにも被害がなかった。被災者の人は無念だろう、どうしてここなのか、どうして一つ隣の道沿いに住まなかったのか、自分が何か悪いことをしたのかと誰にも当てることができない怒りを抱いたまま形だけ復興の道をたどっているのだろうかと考えずにはいられなかった。

私はこれらの光景を見て、ボランティアの本当の必要性がわかった気がする。規模が大きいから、地域住民だけでは手が足りないからボランティアを必要とするだけでなく、心を痛めた被災者の代わりに復興を手助けするのだと思う。ニーズ掘り起しで地域住民を訪問して話を聞いても、現実が受け止められず床を開けられない人、鬱になってしまった人など心の傷が深刻な人はいまだにたくさんいる。災害当初は何が何だか受け入れられなかったと地元社協の方もおっしゃっていた。そんな心が追い付いていない状態で泥出せカビ

取れと言われても難しいだろうと思う。災害が起こったからボランティアが必要なのではなく、被災者がいるからボランティアは必要とされるのかなと一人で勝手に考えた。

テレビでは客観的に見た被害が多く報道され、災害から日がたつと報道も少なくなる。現に私も西日本豪雨災害はもう復興したのかと思っていた。でも作業的にもそうだが、まだまだ被災者の心の傷は治らないままであると三原に行って気づくことができた。やはり現地にこなければ知ることができないことはたくさんあるということが一番このボランティアを通して学ぶことができた。この一週間はいろんなことを学び、知り、いろんなひとに出会い仲良くなり、いろんな感情になったとても新鮮で充実したものだった。埼玉で平凡にアルバイトばかりしている一週間とは価値が全く違う。広島での体験はきっと今後何回もいろんな場面で思い出すことになるだろう、もしかしたらそれは重要な決断をする時かもしれない。この経験がいつか自分が下す決意の理由になり、それがとても前向きなことであるといいなと思う。

この一週間は本当に私の宝物だ。臆病な私は日々に変化をもたらすのが苦手で、何かやりたいと思うことでも一歩踏み出せないことが多く、実際このボランティアも最初は怖くてあきらめていたけど、友人が背中を押してくれたおかげでとても価値のある一週間を過ごすことができた。その友人と、最後に決断した過去の自分の勇気に今では本当に感謝している。それだけではなく、忙しい中災害を私たちに伝えようと一生懸命連れ出し、説明してくださり、わからないことはなんでも優しく教えてくださったVCの運営スタッフの方々、一緒に何日も過ごしてくれた友人や岩手県立大学の方々、決して環境がよかったわけではない場所で現場での作業が慣れていない私とも一緒に笑顔で活動してくださった多くのボランティアの方々、本当にたくさんの面倒を見てくださった新井先生や日野さん、自分が行くまで長い間つないでくれた同じ埼玉県立大学の学生の方々など会う人関わる人すべてに本当に感謝でいっぱいである。

今後は三原市も被災者の方ももっと前向きな方向に進むことを願うしかできないが、復興に直接かかわれなくても、この経験を決して忘れず様々な形で生かしていきたいと思う。

三原市災害 VC 支援学生プロジェクトを終えて

社会福祉子ども学科 社会福祉学専攻 2年 細井由沙

1. はじめに

「平成三十年七月豪雨は何日に起きたか」と咄嗟に問われたら、きっとこの活動に参加する前の私は的確に答えることができなかつただろう。そんな自分でも役に立つことができるのかと、初めは不安であった。以下では、三原市災害 VC 支援学生プロジェクトに参加して学んだこと、そして活動後に考えたことを述べていく。

2. 防ぐことのできない豪雨の恐ろしさ

移動先の VC で目にした七夕の飾りや七月の予定表は、災害があったあの頃から時間が止まったままであることを示している。清掃活動では、トイレの窓の棧や壁に固まった泥が残っており取り除くことが大変だったが、努力した分結果が目に見えてわかる作業で達成感を感じることができた。地域には垣根についた泥や家の周りに積まれた土嚢がまだあるが、小さなところでも見逃さずに綺麗にすることで、災害前の日常を取り戻すのである。

また VC 近くにあるひまわり保育所は、災害当時の状態が色濃く残っており、室内に掲示された笹の葉には、お子さんの成長を願う短冊が飾ってあった。保育所に通う子どもたちが、元気で過ごしていることを願うばかりである。

最終日には、土砂崩れの被害があった福地サテライトを訪れ、土砂とともに崩れ落ちた岩の大きさは想像を超えていた。私たちがどんなに対策をしてもあの岩から家を守ることは不可能であることはわかるが、あの岩が転がって家を壊していく様子は想像できなかった。現場で足を止めると、水の流れる音と虫や鳥の鳴き声のような自然の音しか聞こえない。見学中に感じた植物のほのかな香りは、今回目にした光景とともに忘れることはないだろう。

3. ボランティアが介入することの難しさ

床下清掃を依頼してくださった住民の方は、泥だらけになった商品も綺麗にしてもらうことを希望していたが、商品の価値に関するものに接することは VC で引き受けることができないとのことだった。また、市町村が主体となって運営していることにより、道路を一本挟んでいるだけでも区域外であると行政の介入が困難になってしまう。頭ではこのような線引きは大切なことだと理解しているが、もやもやとした気持ちは晴れない。以上のことから、自分が仕事をする上で何を重視しているかを理解し、今後の学生生活の中で進路を決めていこうと強く考えた。

そして、訪問調査をしていると、「困っていることはないから大丈夫。」と仰っている場合でも、対応に出た住民の方の様子や家の外観、玄関から見える中の状態から、見守りまたは、アウトリーチが必要なのではないかという結論になったケースが数多く見られた。ミーティングでは、ほかのお宅の方が大変だからとボランティアに来てもらうことを躊躇ってい

る住民の方もいらっしゃることを知った。そのため、私たちのような支援者は、地域住民の方々にボランティアをもっと身近に感じていただくためには何が必要かを考えなければならない。

4. ボランティア活動を支えるもの

慣れない土地での活動に加え、引っ越し作業や現地の活動、気温差、変わりやすい天候により、体力がかなり消費される日もあった。約一週間のボランティア活動を、体調を崩さずに行うためには何をすべきかと考えた結果、十分な睡眠とバランスの良い栄養摂取、そして適度なストレス解消に至った。被災された方々を支援する立場は、体調管理を徹底することが重要である。

また、学生のみでの移動では歓談のほかにバイクに煽られたり、夜間にナビゲーションシステムから遠回りのルートを教えられたり、自動車が溝に落ちそうになったりなど様々な出来事が起こる。そのため、ボランティア活動以外での学生同士の交流は、活動をする上での楽しみでもあった。大人数で南方コミュニティセンターの雑巾掛けをしたことは、短い期間を共に過ごした岩手県立大学や、県立広島大学の学生との良い思い出である。

VC 設営時は、翌日のボランティア受け入れ開始に間に合わせることで頭がいっぱいだった。そんな時に、新井先生から案内板にイラストや色を加えてみたらどうかという提案があり、自分なりに工夫して仕上げたところ、ほかのボランティアの方々に華やかになって良いと褒めていただいた。「被災地に千羽鶴はいらない」という意見もあるように、今必要な実用品を提供することも必要であるが、支援者から送られてくる気持ちが活動している人々を元気づけているのも事実なのである。この作業を通して私は、ボランティアに参加する方々が気持ち良く来て、活動を終えることができるように配慮することも大切であることを学んだ。

5. おわりに

本活動に参加することを家族に告げた際、団体で行う活動でなければ止めていたと父は話していた。初めはこの言葉に疑問を抱いていたが、災害支援について調べていると、二次災害のほかに、避難所などで起こる女性や子どもを狙った犯罪や盗難、詐欺の存在を知ったのである。このことから、女性である自分が一人で被災地へ向かうことがいかに危険であることを学んだ。災害のような非日常の際は、警察の目が届きにくくなってしまうため、自分の身は自分で守らなければならない。被災者、支援者ともに防災色への配慮や二人以上での行動、近隣住民との助け合い、公的機関からの情報収集といった身近でできる防犯が、今後起こり得る災害時にも役立つと私は考える。

この度被害にあわれた方々の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げるとともに、本活動を支援してくださった新井先生をはじめ、社会福祉協議会の皆様やボランティアの皆様、私たちに宿を提供してくださった高森ご夫妻、その他大勢の皆様に感謝申し上げます。

広島災害支援ボランティア活動報告

社会福祉子ども学科 社会福祉学専攻 2年 加藤 彩結

私は9月21日から9月28日までの8日間を広島県三原市で過ごし、ボランティアセンターの運営と現地での活動に携わった。災害ボランティアに参加するのは初めてで、ボランティアセンターがどのような場所かも知らなかったが、「どのようなものか」という情報以上のものを学ぶことができた。

災害ボランティア、と聞くと現地での活動を真っ先に思い浮かべるが、今回はその活動を支えるボランティアセンターでの活動が主だった。センターでの業務に関わらせていただいたことで、被災から3ヶ月弱がたった今、どのようなニーズがどれくらいあるのかを、特にデータ入力を通じて知った。自分たちよりも他の人の方が大変だから、といってボランティアの要請をしなかったり、床は乾いたから大丈夫、といって床下の確認をしていなかったりといった方が何人かいらした。また、業者に依頼しているがまだ対応されていないという方も多くいらして、今だに手が足りていない状況であることを知った。実際に現地に訪れるまで持っていた、もう3ヶ月というイメージが、まだ3ヶ月、という認識に変わった。それくらいニーズは残っていたし、埋もれていたニーズが多くあった。より気軽にボランティアの申請ができるようにするためにはどうしたらいいのか、と思った。

ニーズの掘り起こしは、ローラーに同行させていただくことで学んだ。訪問先の方と今の生活状況を聞き、さりげない会話の中から拾っていた。そのさりげなさのために、質問の順番を変えたり、被災と関係のない世間話から始めたりと多くの工夫がされていた。多くのお宅訪問を通じて、当時の状況を写真に撮ったものを見せていただき、苦労したことやそれをどのように乗り越えたのかをたくさん教えていただいた。浸水や土砂の被害がなくても、断水や停電で苦労した方が多くいらした。井戸水を共同で使ったり、発電機の貸し借りをしたりして乗り越えたというお話を聞き、地域の人々の結びつきの強さを感じた。それと同時に、地元で同じような自然災害が起こった時に、私たちは隣近所の人と協力して乗り越えることができるのだろうか、と不安も感じた。センターの方やボランティア参加者は明るく前向きな方が多かったが、訪問先では必ずしもそうというわけではなく、訪れた私たちをあからさまに警戒したり、会話を避ける方もいた。もちろん埼玉から来た、というだけで感謝をされることもあったが、自分はきちんと貢献できているのだろうか、という気持ちは常にあった。被災していない外部の私たちが被災者の気持ちを完全に理解するのは不可能であり、だからこそ笑顔で挨拶をすることや、寄り添って話を聞くことが求められているということがよくわかった。

広島で過ごしている間は、普段聞かないラジオを毎日聞いた。今となっては関東では報道されない復興の状況が報道されていた。その中に、自分たちが関わったボランティアの内容が流れてきて、現地にとっては大きなニュースだということを痛感した。それは保育園の清掃プロジェクトの話であったが、次の日にラジオを聴いて来た、という方もいらし

て、この活動がきちんと周知されてかつ認められたような気がして嬉しかった。全国ネットで被災について取り上げられるのは話題がホットな間だけだが、3ヶ月経っても手をつけられていない状況を知ってもらうこと、復興には本当に多くの時間がかかることを広く知らせる必要があると感じた。

そこで、学生である私たちが、復興支援でできることはなんだろう、と考えた時に、やはり周囲に情報提供をすることが一番ではないか、と考える。もちろん現地で力を発揮することももちろん大切だ。しかしそれだけではなく、友人間の会話で実際の現地の状況を伝えたり、SNSを駆使して情報を拡散することが効果的ではないかと思った。事実、家族や友人にこの話をした後に保存食の確認をしたり、改めて被災情報を検索したりしていたので、自分たちの災害への備えも含めて効果があるのではないかと感じた。したがって、自分たちの経験を伝えることが復興支援につなげることができるのではないかと考える。

この活動参加を通じて、ボランティアセンターの運営とその重要性、復興は長期戦であること、人の温かみ、普段の災害への備えの大切さを学んだ。今回、現地の方々やこの活動を支援してくださった方のおかげで、貴重な経験をすることができた。今後もこの経験を活かして精進したいと思う。

三原市災害ボランティアで学んだこと・感じたこと

社会福祉子ども学科 社会福祉学専攻 2年 小出 帆夏

○はじめに

9月24日～28日の4日間、広島県三原市のボランティアセンターで災害ボランティアに参加した。ボランティアの方々と一緒に実際にボランティア活動を行うことや、ボランティアセンター内の事務的なことを含めた手伝いを通してボランティアセンターの動き、役割を学んだ。

○学んだこと、感じたこと

私は実際のボランティアセンターに初めて訪れて、どのような仕組みで動いているのか自分の目で見て、参加して、学ぶことができた。ボランティアセンターはニーズとボランティアとを繋ぐ仲介であり、いつどんなことが起こるのか、どのくらいの人が行き来するのかなどわからない状態でありながらもうまくマッチングを行い、ニーズに対応していた。そのため、活動のはじめとおわりには必ずミーティングがあり、それぞれに分かれている班が具体的な人数、これからやること、課題など細かいことまでを報告し合い、全体で共有していた。そして考えるべき問題はその場で意見を出し合いどのようにしたらよいか自然に進んでいた。これらは重要であると感じた。

ボランティアの方々と一緒に行った活動では壁に付着した接着剤をヘラで削り落とす作業や、柱や床下に溜まった土を落として集める作業を行った。浸水した家のため、壁にはカビが生えている部分も多くあった。そこで一緒に活動していたボランティアの方が、カビは体に悪く病気になった人もいる。作業するときは必ずマスクをするようにとおっしゃっていて念のためくらいに思って持ってきていたマスクとゴーグルをつけた。高い部分の壁は脚立を使って行い、腕の力もかなり使った。作業を進めるコツやアドバイスも教わり、ボランティアを長く経験してきた方から学ぶものは多かった。活動が終わると、とても達成感があり、スポーツをした後のような清々しい気持ちになった。

地域の家を訪れて回り、ニーズを掘り起こしつつ状況を調査するローラーにも参加した。一軒一軒記された地図を見て漏れなく訪問し、調査したことはヒアリングシートに記入した。ローラーで訪問する際の移動中には、水害で家の一階部分の窓がすべて取り外しである家がほとんどであることや、道が途中で崩れていて先へ進めないことがあり、災害から約二ヶ月経っても恐ろしさを感じた。一軒ずつ訪問したが、実際に話を聞くことができた家は半分もなかった。その中には、災害地域を狙った詐欺のようなものと疑いインターホン越しに拒否されることもあった。このような詐欺では詐欺被害に直接あった方だけでなく、その後にも影響を及ぼす迷惑なものだと感じた。それでもお話を聞けた方からは、災害時にどのように生活をしていたか、今困っていることはないかなどを調査した。その中で私が最も印象に残ったことは、災害時に断水していた際に、地域の中で井戸水を

所有している家から借りていたという声が多かったことである。普段からの地域交流はこのようなときに大きな役割を果たすのだと感じた。この他にも高齢で一人暮らしの方が、災害の後に周りの家の人が様子を見に来て話を聞いてくれたとおっしゃっていた。私が訪問したときには新たなニーズはなかったが、地域交流の大切さを学んだ。

○おわりに

三原市災害ボランティアに参加して、ボランティアセンターでの事務的なことを含めた手伝い、実際に活動やローラーに出向き、それぞれで多くのことを学んだ。災害時も災害の後も、地域の方々に支え合っていたということ、ボランティアの方がいるからこそできることを聞いたり見たりし、どれも一人ではできないことで支援し合うことが大切だと感じた。またときには支援が必要なときには助けが欲しいという声を発信することも重要だと学んだ。

三原市災害ボランティアセンターでの活動に参加して

社会福祉子ども学科 社会福祉学専攻2年 佐藤洗希

はじめに

私は9月24日から10月1日の計8日間広島県三原市の災害ボランティアセンターにおいてボランティア活動を行った。最後まで怪我することなく、無事活動を終えられたことは非常に良かった。今回の活動で学んだこと、感じたことなどを報告したいと思う。また、約50日間にわたる三原市災害ボランティアセンター運営支援におきまして、埼玉・岩手の学生および教員、学長、越谷社協、三原市社協、派遣ブロックの方々、多くの方にお世話になったこと、初めに感謝申し上げたい。ありがとうございました。

活動を通して

私が現地で活動したのは先にも述べたとおり9月下旬からで、このプロジェクトにおいては集大成を任されたプレッシャーや、災害ボランティアおよび、災害ボランティアセンターの運営支援は初めてであったことなど様々な不安があった。しかし、現地に行ってみるとVCの方々優しく迎え入れてくださり、不安も和らいだ。現地に入るまでは、被災した当時から約3ヶ月経っているということからある程度回復はしているのではないかと思っていたのだが、実際はニーズが少なくなっているにもかかわらず被害が甚大であったところは未解決のままだし、ボランティアでは解決できるか分からない困難なニーズもあってまだ元の生活に戻れたとは言えないのだなと感じ、当時自分が小学生の時に被災した東日本大震災を思い出した。少しでも寄り添って、役に立てるように頑張ろうという気持ちになった。

活動内容としては主にボラセン内の事務作業が多く、地域の方と直に接する機会は少なかったが、運営をどのようにしているか、ボランティアに来た方に対しての接し方、ニーズ受付の対応などを直接見ることによって学ぶこともあった。授業で社協の役割や、コミュニケーションの取り方などは学んでいるが実際に経験してみても学ぶこともあるし、座学じゃ知ることができないこともあるのだと感じた。また、ボランティアに参加してくれる方とも一緒に活動し、被災当時の状況をお話ししてくれたり、埼玉から来てくれたことに関して褒めてくれたりして関係を深めることができた。ボランティアに関して知識を持っている方もいてそこでも刺激を受けた。被害状況関係なしに地域の方々が協力して復興しようとしている姿がとてもまぶしくかっこよく見えた。今後地域社会がメインとなって福祉も進んでいくと考えると理想の地域なのではないかと思った。

また、活動を通して気になったことがある。それは、ボランティア活動の線引きについてだ。未解決のままニーズの中には、何度もボランティアに入っているが修繕の目処が立たないものがあり、どこまでボランティア活動とするのを考える必要もあるのではと思った。また、それに伴い行政や業者との対応についても違和感を持った。早いところでは業者に頼んで解決しているところもある。被害の甚大さ、地域差もあると思うが解消していかなければ

ならない問題だと思う。中には手つかずになっていることもあるのでアウトリーチをなるべく積極的に行うことも必要だとわかった。これからもボランティアを求める人がいる中で、そのニーズが果たしてボランティアで対応できるものなのか、ボランティアの範疇を超えてないかを考えながら、現場を確認したりしてニーズを受け付けなければならないのだと分かった。

最後に

最初にも述べたとおり、このプロジェクトには多くの方の協力によって最後まで活動することができた。その多くの方達と関わったことで大変貴重な経験をさせていただいた。とても中身の濃い内容の1週間であったが、もっと事前の情報収集や学習をしていればさらに良い経験になったかもしれない。だがしかし、最後に三原社協の方々から、そして地域の方々から感謝の言葉をいただいた。それだけでもこの活動に参加することができて良かったと思った。災害は避けることができないし、人々の思いに関係なく起こるものであっても人々が協力しあい、支え合えれば乗り越えられる。この活動を通して私は改めてそう感じた。このような災害が起きたときはまた運営を支援したいと思った。また、ここでできた縁を、学びを、経験を大切にしていきたい。

1. 緒言

(1) 自然災害と学生の支援活動

日本では、毎年各地で自然災害が発生しており、被災地における様々な支援活動を行うボランティア活動は、これまでも復興に大きな力をもたらしてきた。1995（平成7）年の阪神淡路大震災ではそのような力が注目され、同年は「ボランティア元年」とも称された。その後の2004（平成16）年の中越地震、2007（平成19）年の中越沖地震、そして2011（平成23）年の東日本大震災などにおいても様々なボランティア活動が行われている。近年では、例えば2016（平成28）年9月に鬼怒川の堤防決壊により発生した茨城県常総市における水害では、延べ33,766人のボランティアが5,124件のニーズに対応した¹⁾。

このような災害時の支援活動に対して、学生の関心は比較的高いと言われている。公益財団法人日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）が行った全国の学生1万人を対象にしたボランティアに関するインターネット意識調査によると、この1年間でボランティア活動をした学生の活動分野は、「子ども・青少年育成」（22.3%）が最も多く、次いで「教育・研究」（11.9%）、「保健・医療・福祉」（11.8%）などが続くなか、「緊急災害支援」は5.1%と少数にとどまる。しかし、この1年間でボランティア活動に参加したことがなく、かつ今後活動に参加したいと思っている学生が参加を希望する活動分野は、「緊急災害支援」（15.3%）が最も多く、次いで「まちづくり・まちおこし」（14.6%）、「芸術文化・スポーツ」（13.3%）、国際協力・交流（12.4%）などの順となっている²⁾。

実際、東日本大震災前後より、学生の支援活動もいっそう活発になっている³⁾。社会福祉法人中央共同募金会は、各地の災害における被災地支援活動に対して助成を行っているが、ごく最近の「平成30年7月豪雨」への支援活動に対する第1回助成決定団体94件のリストを見ると、間接的に学生ボランティアを集める団体を除いても、助成を受けた大学および学生団体は10団体と1割以上を占めている⁴⁾。

このようなデータからも、自然災害が多発する中で被災地に「思い」を馳せ、「何かできることはないか」と考える若者はたくさんおり、そして実際に活動を行っていることがうかがえる。このように「思い」を活動に繋げることにより、様々な経験を通じて学ぶことは、学生にとって、そして学生が生きる今後の地域社会にとっても、大きな「力」を蓄積する機会となるだろう。

(2) 災害時の「支援活動の組織化」と大学

ところで筆者は、岩手県和賀郡の湯田町社会福祉協議会（現在は旧沢内村と合併し西和賀町社会福祉協議会）に在職中、岩手県九戸郡軽米町を中心に発生した「平成11年10月洪水」（1999年）の復興支援のため、ボランティアバスによる支援活動を担当し町民とともに現地に赴いた。また湯田町は豪雪地帯であったことから、雪かきボランティア活動である「スノーバスターズ」や、町外から雪かき参加者を募集する「雪かき助っ人ボランティア事業」を担当していた。

このような経験を踏まえ、特に災害時は、職場や団体において支援活動を組織化して現

地に向かうことが有効であると意識するようになった。もちろんこの究極は災害支援活動専門の NPO などの組織化である。しかしそこに至らずとも、各職場や団体において活動者を組織化していれば、活動受け入れ側の災害ボランティアセンター（以下「災害 VC」と表記）などは活動量や時間をある程度想定することができ、一定の統率も取れることから様々な調整コストの軽減も図ることができる。活動を行う側も、短期間であっても知識やノウハウの交換や蓄積が可能となり、効率的・効果的な活動を行っている実感も得やすい。これらのことから、埼玉県立大学入職後、「平成 16 年 7 月新潟・福島豪雨」（2004 年）では、参加を希望した本学を含む埼玉県内大学生 5 人を連れて新潟県三条市に出向き、災害 VC の運営支援活動を行ったこと⁵⁾を皮切りに、学生の被災地での活動を支援してきた。また、埼玉県立大学は、2004 年 10 月に発生した新潟中越地震の際にバスをチャーターし、教職員と学生が新潟県の南魚沼市立ゆきぐに大和病院に出向いて支援活動を行った経験がある。被害の大きかった地域からの入院患者・福祉施設利用者の受け入れ支援活動を行っており、その活動にも参加する中で、大学としても災害福祉支援活動に備える必要性を痛感した⁶⁾。

今後も自然災害が多発することが予想される中で、学生の活動参加とそこからの学びを促すための一つのオプションとして、支援活動を組織化して災害時に活動を行うことは、方法論として発展させ、今後各大学等で備えておくことが必要であると考えます。

（3）本稿の目的

以上の社会的及び実践的な背景を踏まえ、本稿ではこれまで筆者が行ってきた災害時の学生による支援活動のコーディネート経験から、「きっかけ」をいかに作り、どのように学生は活動に至ったのかについて報告する。そのことを通じ、学生による災害福祉支援活動を継続するためにはどのような課題があるのか、また活動の経験を学びや力に変革してもらうにはどのような取り組みが必要なのか、今後の展望を述べていきたい。

なお、災害時の支援は、無償のボランティアに限定されず様々な活動が行われており、学生活動も瓦礫の撤去や泥出しなどの活動のみならず、自治体や社会福祉協議会などによるフォーマルな生活支援活動の一端を担うことも多い。このことから、本稿では一般的に用いられている「災害ボランティア（活動）」という言葉は用いず、災害時の福祉的な支援活動を総称して「災害福祉支援活動」とする。

なお、本報告執筆時点では、学生個人からデータを取得しておらず、取り組みのプロセスを記述していることから倫理審査を受けていない。写真の掲載については、本人に説明の上同意を得た。

2. これまでの学生による災害福祉支援活動の取り組み

では、これまで支援してきた近年の学生による災害福祉支援活動の例を紹介したい。

（1）「東日本大震災」（2011 年）における学生活動

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災と、それに伴う福島第一原子力発電所の事故に伴い、数千人の双葉町を中心とした被災住民が「さいたまスーパーアリーナ」（埼玉県さいたま市）に避難するとの報道があった。長期化が予想されることから、筆者は被災者の生活支援活動が必要であると考え、3 月 17 日に現地に赴き、埼玉県職員や埼玉県社会福祉

協議会職員と協議した。翌日学内の幹部教職員と会合を持ち、学生の組織的活動支援を行うことを確認し、メールによる募集を行った。3月19日から徐々に避難住民が移動しており、この間、埼玉県社会福祉士会役員、さいたま市保育課職員、子育て支援 NPO 役員、そして学内の教職員等と協議しながら、学生活動の調整を行った。登録学生は 77 名で、3月20日から3月31日まで延べ約 200 人が活動に参加し、本学学生のほか日本大学、桜美林大学、青山学院大学、横浜国立大学の学生も加わった。

主な活動は、子どもに対する支援（屋内外での保育、散歩や遊び支援、図書館の運営、迷子の確認）、相談支援（社会福祉士会等と共に健康・生活相談の聞き取り補助）、ゴミの回収、救援物資や避難者の荷物の仕分けなどである。当時の社会福祉学科の学生らがリーダーとなって学生のシフトを組み、朝晩のミーティングなどを運営して活動にあたった。

この活動に参加した学生の数名はこれを契機に他の被災地支援活動を行っている。また、同様に参加者の一人である健康開発学科口腔保健科学専攻の学生は、これを契機に「がんばっぺ★SPU」というサークルを結成し、ボランティアバスのチャーターによる被災地支援活動、埼玉県内における広域避難者のサロン活動の支援、学園祭における福島の特産物の販売による復興支援活動などを行った。現在、同サークルは発展的に解消し、「埼玉県立大学学生ボランティア支援サークル Solations」に引き継がれている。

（2）「平成 28 年熊本地震」（2016 年）における学生活動

2016 年に発生した熊本地震の際、筆者は旧知の「災害ボランティア活動支援プロジェクト会議」（以下「支援 P」と表記）のメンバーとともに、5月1～4日の日程で被災地に出向いた。支援 P とは、中央共同募金会が設置主体となり、企業や NPO、社会福祉協議会関係者が協働して被災地支援を行う全国組織である。熊本県社会福祉協議会、熊本市社会福祉協議会、阿蘇郡西原町などを訪問して VC 運営に関わるニーズを確認したのちに、大津町社会福祉協議会災害 VC にて運営支援活動を行った。その縁もあり、支援 P および西原村社会福祉協議会とともに、夏休み期間中の VC の運営に関して、学生の支援を得る活動スキームを企画した。学内メールにて呼びかけたところ、約 20 名の学生から問い合わせがあった。多額の交通費もかかることから、最終的には本学の 7 名の学生が登録。内訳は男性 1 名、女性 6 名であり、社会福祉子ども学科社会福祉学専攻学生から 4 名、看護学科から 3 名が参加した。

2016 年 9 月 13 日、筆者と社会福祉子ども学科の学生が現地に出向いて活動して以降、9月30日まで1～3名の学生が交代でボランティアセンターに赴いた。主な活動は、ボランティアセンター運営業務（ニーズ受付・ニーズ票記入・ボランティア受け入れ周辺業務・データ入力・集計・マッピングなど）、被災家屋における家財の搬出・廃棄物のトラック積み下ろしなどである。現地での宿泊先は、西原村社会福祉協議会の一室の畳の部屋をお借りし、寝具は寝袋を持参した。

活動終了後、振り返りの機会を設け、学内における報告会を開催。学生と共に教職員も参加し、支援活動の実際と今後の課題について共有した。なお、現地までの交通費が多額になるため、活動助成制度の創設を構想し学生支援委員会等で審議してもらったが、時間的余裕がなく叶わなかった。一部の教員からカンパをいただき、最終的には学生 1 人当たり 20,000 円の助成を行った。

(3) 「平成 30 年 7 月豪雨」(2018 年)における学生活動

2018 年 7 月、西日本を中心に記録的豪雨災害が発生した。被害は甚大であり長期的支援が必要であると考えられたため、筆者は夏休みの学生ボランティアとして活動支援をすることを構想した。7 月 9 日に学内メールで活動者を募集したが、登録者は 3 名であったため、7 月 27 日に本学のボランティア活動支援サークル **Solutions** の幹部学生とミーティングし、サークルとして活動することを提案。最終的にサークル内外の 13 名の学生が登録するに至った。内訳は男性 3 名、女性 10 名であり、社会福祉子ども学科社会福祉学専攻から 11 名(1 年生 2 名、2 年生 7 名、3 年生 1 名、4 年生 1 名)、看護学科から 2 名(2 年生 2 名)が参加することとなった。

並行して活動先の検討・調整を行った。「平成 28 年熊本地震」の際と同じく支援 P の取り計らいがあり、彼が活動先として派遣されていた広島県三原市社会福祉協議会において、学生活動受け入れの可能性を打診してもらった。筆者も 8 月 7~11 日にかけて現地へ赴き、自ら災害 VC の運営支援活動を行うとともに、三原市社会福祉協議会事務局長や災害 VC のセンター長などと協議し、最終的な学生活動スケジュールの提示と活動内容の確認、宿泊先や入浴場所の確認と調整を行った。

こうして 8 月 13 日に最初の学生が現地入りし、数名の学生が約 1 週間交代で引き継ぎながら 10 月 1 日まで活動を行う予定を立てることができた。途中、穴が開いてしまう日程があったが、タイミングよく岩手県立大学を中心とする学生ボランティアグループから参加意向があり、50 日間途切れることのない学生による災害 VC 運営支援活動が実現した。その後、長野大学や県立広島大学の学生も加わり、延べ約 250 人の学生が活動を行っている。宿泊先は、災害 VC が設置されたコミュニティセンターとともに、ご厚意で空き家を貸してくださる方が現れ、社会福祉協議会が契約者となって賃貸契約を結び、学生の宿泊場所として提供していただいた。また、寝具は災害支援 NGO から寝袋を寄贈してもらった。

学生の主な活動は、熊本地震と同様に VC 運營業務、被災家屋・公共施設での泥出しや清掃などである(図 2)。VC 運營業務では、多い時には 100 名を超えるボランティアが訪れる中、看板作成やテント・資材・水の配置などの受け入れ態勢の整備や、オリエンテーションの説明・ボランティアの誘導などを行い、また活動情報のデータ入力やマッピング作業なども担った。さらに、被災しているがニーズがあがってこない地域・世帯をくまなく訪問調査する活動(通称「ローラー」)なども担い、学生はそこから様々なことを感じた様子である。平穏な暮らしを一変させていることにショックを受けつつも、被災者の生活ニーズについて深く考え、また被災者に寄り添う職員の接し方から多くのことを学び取った。

訪問を受けた被災住民においても、遠隔地から支援に訪れた若者に驚き、重い口が開いたり、涙ぐみながら「元気づけられた」と感謝の言葉を発する方もいたという。そして地元社協職員や応援社協職員も、学生に支援のあり方について様々なことを伝え、交流する中で、支援活動の意義・意味を見つめなおしながら活動を行っていた様子がうかがえた。長期間の活動を終えて帰途につく学生に対し、「若い力をもらうことによって業務を続けることができた」という言葉を発し、別れ際に学生と何度もカメラに納まる地元職員の姿

もあった。

このように、学生による災害福祉支援活動は、学生自身の大きな学びの機会になったのはもちろんのこと、被災地にも大きな力をもたらしたと言ってよいだろう。

3. これまでの活動を踏まえた今後の課題

以上の経験を踏まえ、学生による災害福祉支援活動を今後も継続し、また活動の経験を学生の学びや力に変えるにあたって取り組むべき課題を述べておきたい。

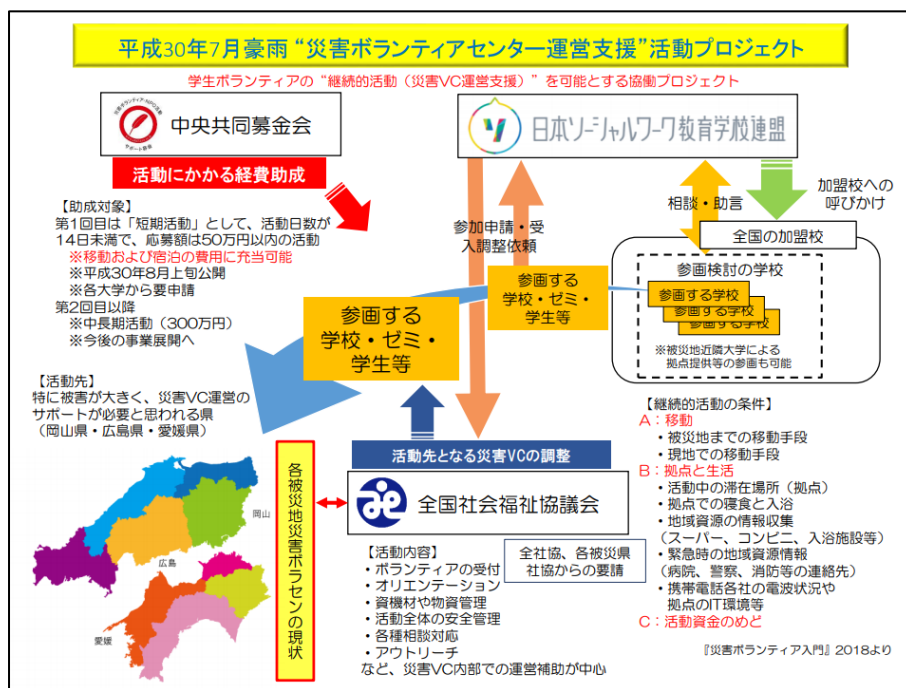
(1) 学生による災害福祉支援活動を進めるための共通基盤の確立

この種の活動を行うにあたって、様々な関係者から発せられるのは、「事故があったときにはだれが責任を持つのだ」という声である。これはおそらく全国の多くの大学で、災害福祉支援活動を行う際には議論となる課題である。この間、関係各所から災害福祉支援活動に対する学生の取組支援を行うよう要請されている中で、大学としてこの種の活動をどのように位置づけ支えるのかについて、共通基盤を確立する必要があるだろう。

筆者の場合、近年の災害で学生と活動を共にする際には、状況は幹部教職員に報告するものの、とくに承認・承諾を求めることなく実施してきた。学生各自に居住地の社会福祉協議会において加入することのできる「ボランティア保険」に加入させ、事故があった際にはその補償があること、大学加入の保険の対応はないことなどを伝えた。また緊急連絡先などをあらかじめ聴取し、必要に応じて保護者等に連絡できる体制を整えた。

「平成30年7月豪雨」における活動では、学生サークルに打診してその活動として実施すること、教員はそのサポートを行うというかたちで実施した。学生サークルの課外活動としてであれば、ボランティア保険とともに大学で加入する保険も適用されることから、学生と相談してこのような方式をとることとなった。当面はこの方式で学生活動支援を行うことになるだろう。

近年の災害では、例えば2018年7月17日の文部科学省高等教育局長・生涯学習政策局長名で発出された「平成30年7月豪雨」に関する通知⁶⁾では、「ボランティア活動のための修学上の配慮」「ボランティア活動に関する安全確保及び情報提供」を各大学に求めている。また、同年7月25日には、社会福祉士等を養成する高等教育機関が加盟する一般社団法人ソーシャルワーク教育学校連盟（以下「ソ教連」）



【図1】ソーシャルワーク教育学校連盟が提起したプロジェクト

が通知を出し、各校に学生による災害 VC 運営支援を行う「災害 VC 運営支援活動プロジェクト」が提起され、参加協力の要請を行っている（図 1）。

このように、教育サイドにおいて学生の活動を勧奨し、また学生活動に対する支援が要請されているのは、災害福祉支援活動の担い手として学生の力に期待が向けられているとともに、副次的には、災害福祉支援活動が教育・学習活動としての側面も併せ持つと認識されるようになった証左である。今後も自然災害は多発することが予想されている中で、災害福祉支援活動を単に学生の自主的・主体的な活動としてのみ位置づけるのか、教育・学習活動としても位置づけるのかは議論されてよい。後者も組み込むならば、大学としてのリスク管理も含めた共通基盤の確立を目指す必要があるだろう。

もちろん、ボランティア活動はあくまで主体性を旨とすべきであり、国や全国組織からの大義名分の調達、一方で注意し吟味すべきである。学生による災害福祉支援活動を企画するにあたっては、被災地・被災者と学生を中心に据えて取り組むべきであることは言うまでもない。

（２）活動先・滞在先・活動資金の検討や確保

活動先をどのように見つけるかについては、報告者の場合には、人的ネットワークを活用させていただくとともに、実際現地に赴いて依頼や調整を行うことを大切にしている。今回、ソ教連は先述の文書において活動先のマッチングを支援する枠組みを示した。今後もこの枠組みの発展に期待したいが、学校・教職員としては、このマッチングに過度に依存するのは避けるべきだろう。自立した学生団体が活動するのならば別であるが、学校や教職員自身が一度は現地に出向いて依頼や調整を行うことにより、学生が気持ちよく活動を行うことのできる条件を整備する必要があるのではないだろうか。

活動先が居住地と離れている場合、学生にとって無料・低額で寝泊まりできる滞在先や入浴施設の確保は必須である。熊本県西原村や広島県三原市では、社会福祉協議会や地元にはゆかりのある一般の方のご厚意により確保できたが、好条件がそろうとは限らない。その都度情報を収集し、打診するとともに、全国どこでも災害が起こりうることを念頭に、各学校にて災害時に受け入れる学生ボランティアの滞在先を想定しておいてもよいだろう。

同じく活動先が遠隔地の場合、学生が旅費をすべて負担することが困難な場合もある。「平成 30 年 7 月豪雨災害」での活動にあたっては、（社福）中央共同募金会による「ボラサポ」の助成を得ることができ、他の寄付金と相まって学生の交通費を確保することができた。今後は学内における活動助成の仕組みの確立や、企業の CSR 活動との連携も見据えて、各校独自の活動資金調達の仕組みも準備されてよいだろう。

（３）活動上のリスクの予想と対応

災害福祉支援活動には様々なリスクがあるが、事前のオリエンテーションはもちろんのこと、活動中や活動後も様々なフォローアップをしていく必要がある。これまで報告者が想定してきたリスクは、活動中のケガや病気はもちろんのこと、悪天候時の移動の判断、そして被災地の状況や活動内容にショックを受けて心身の負担からなるメンタル・ヘルスへの対応である。

活動中のケガや病気を予防し、また快適に生活をするためには、適切な装備を事前にそろえること、現地での活動内容と学生の身体状況などを考慮して調整を行うことなどが考

えられる。「平成 30 年 7 月豪雨」における活動では、各自が用意すべきもの、現地で調達しうるものをリストアップして学生に示し、また高額で共有して使用できそうなもの（防塵ゴーグルやゴム手袋など）は活動資金よりあらかじめ購入して学生活動の前に筆者が出向いて現地に配置した。

また、「平成 28 年熊本地震」における活動では、日常生活には支障がないが足の機能に不安がある学生の参加意向があったが、現地スタッフにそのことを伝え、デスクワーク中心の支援活動を行ってもらった。このことも踏まえ、「平成 30 年 7 月豪雨」における活動前には、学生には自ら出来ること、出来ないことを現地スタッフにしっかりと伝え、危険のないよう出来る範囲での活動を行ってもらうことをあらかじめ伝えている。

2018 年は台風が頻回に日本列島を襲ったため、「平成 30 年 7 月豪雨」における活動の際には、学生の現地までの移動の可否について判断も困難を極めた。移動中に災害に見舞われて事故などにあわないよう、天気予報や災害情報を絶えずチェックし、学生と連絡を取り合いながら判断を行った。実際、往路・復路ともに、台風直撃のため延期の決定をしたことがそれぞれあった。

メンタル・ヘルスについては、活動前のオリエンテーションを綿密に行い、活動中に何か心身の異変があったらすぐに相談し休むようにすること、活動中や活動後にも SNS を通じて頻繁にコミュニケーションをとることを心がけた。

以上がこれまで想定したリスクとその対応であるが、未だ十分であるとはいえない。とくにメンタルヘルスについては、今後は専門のカウンセラー等の協力をあらかじめ得るなどの準備が必要であると認識している。また、今までのところ学生そのものが活動中に大きな失敗や失礼な対応によるトラブルを引き起こしたことはないが、今後はそのようなリスクも視野に入れて、事前準備と現地スタッフとの連絡体制・信頼関係の構築をしっかりと行う必要がある。

（５）学びをいかに蓄積し次の災害に備えるか

「平成 28 年熊本地震」における学生活動では、活動終了後に振り返りの機会を持ち、学内において学生・教職員を対象とした報告会を開催した。「平成 30 年 7 月豪雨」での活動では、すでに学生はサークル活動として清透祭（学園祭）においてポスターの掲示と来場者への説明コーナーを設けたほか、今後活動報告会を実施する予定である。これらを通じた、体験を振り返り、意味づけることにより、普段の学習へのモチベーションや今後の目標設定・キャリア形成に生かしてもらいたい。

またさらに、次のような取り組みを通じて、個人の学びや力として高めてもらうとともに、「学生全体の力」や「大学全体の力」に変革していくことも検討したい。

まず、次に発生するかもしれない他所での災害時における、学生による災害福祉活動のスムーズな実践のための取り組みが必要である。学生は数年たてば卒業してしまうことから、なかなか活動経験の蓄積は困難である。そのことも念頭に置きつつ、学生には活動成果の蓄積をしてもらい、教職員が報告書などに加工したうえで、来るべき災害時の教材になるようにし、定期的にノウハウを伝達する場も作る大切になるだろう。

第 2 に、自らの学校周辺において災害が発生した際に、学生による減災活動や災害福祉支援活動への応用ができるよう、準備ができればと考えている。埼玉県であれば、首都直

下型地震や豪雨災害による被害を想定し、特に大学周辺に住む学生の被害を最小限にする取り組みや、大学や近隣の公共施設が避難所などになった場合に何らかの支援者として関わることを想定する必要があるだろう。他所の支援をする経験だけではなく、その経験を生かして自らがすむ地域社会を見つめなおし、様々な備えを行うことは、学生本人にとっても、教育機関にとっても、そして教育機関が立地する地域社会にとっても大切なことであろう。

例えば岩手県立大学では、2006年に災害時を想定した学生ボランティアサークル「風土熱土 R」が結成され、様々な被災地での活動を行っているほか、平時からの防災・減災活動を行っている。高知県立大学では、「東日本大震災」の支援活動を経験した学生を中心に、地元の防災活動にも取り組むサークル「イケあい地域災害学生ボランティアセンター」が設立され、様々な活動を行っている³⁾。

本学においてはこの間、越谷市消防本部所属の「学生機能別消防団」の加入促進に取り組み、数名の学生が今年度より入団した⁹⁾。被災地での経験から得た「学び」を、このような平時からの取り組みと接続し、学生自身や学校、そして地域社会の「力」に変える支援も、今後は行っていきたい。

謝辞

本稿で紹介した「平成 28 年熊本地震」「平成 30 年 7 月豪雨」における学生の災害福祉支援活動においては、次の団体・個人に多大なご協力をいただいた。関係者の皆様に深く感謝申し上げたい。

<災害 VC 設置団体>

(社福) 西原村社会福祉協議会 (社福) 三原市社会福祉協議会

<学生活動の調整・活動支援>

(社福) 越谷市社会福祉協議会 日野泰宏様 日本福祉大学准教授 山本克彦様
災害ボランティア活動支援プロジェクト会議

(一社) ピースボート災害ボランティアセンター

<学生の宿泊先の提供・寝具の提供>

(社福) 西原村社会福祉協議会 (社福) 三原市社会福祉協議会
広島県三原市 藤本昇覚様 災害 NGO 結 代表 前原土武様

<活動資金の助成・寄付>

(社福) 中央共同募金会 学内有志教員

*本稿は、「第 48 回全国社会福祉教育セミナー2018」における第 8 分科会「災害時の福祉支援活動：学校のチカラ」の報告要旨に、加筆修正を加え、埼玉県立大学学内学会誌『保健医療福祉科学』に投稿したものである。引用の際には、そちらを参照していただきたい。

文献

1) 茨城県常総市 ボランティアについて。

<http://www.city.joso.lg.jp/jumin/anzen/kinkyuusaigaijohou/sonotajyohou/1454>

- 387859534.html 2016年11月12日更新。アクセス2018年11月2日。
- 2) 公益財団法人日本財団学生ボランティアセンター 全国学生1万人アンケート～ボランティアに関する意識調査2017～全設問データ資料。
<http://gakuvo.jp/images/newsrelease/10000student/2017student10000fulldate.pdf> 2017年9月12日更新。アクセス2018年11月2日。
 - 3) 山本克彦編著。災害ボランティア入門：実践から学ぶ災害ソーシャルワーク。京都：ミネルヴァ書房；2018。
 - 4) 社会福祉法人中央共同募金会 ボラサポ・豪雨災害第1回助成の決定について
https://www.akaihane.or.jp/saigai/2018_july_gouu/borasapo_decision/ 2018年9月18日更新。アクセス2018年11月2日。
 - 5) 新井利民。三条市災害ボランティアセンターでの2日間を通して。埼玉県危機管理防災部防災ボランティア通信誌「いざっ!」。2004; 30: 4。
 - 6) 新井利民。本学の特徴を生かした災害復興支援のためのいくつかの検討事項。埼玉県立大学新潟中越地震災害応援隊編。医療福祉施設の災害時支援。2005: 9-11。
 - 7) 文部科学省高等教育局長・生涯学習政策局長。平成30年7月豪雨に伴う学生・生徒のボランティア活動について（通知）（30文科高第324号）。2018。
 - 8) 一般社団法人ソーシャルワーク教育学校連盟。平成30年7月豪雨災害に対する支援活動にかかるご協力について（お願い）（ソ教連発第2018-50号）。2018。
 - 9) 越谷市消防本部。越谷市消防団学生機能別団員発足の道筋。近代消防。2018; 56(13): 1-6。

2018 年西日本豪雨災害被災地における学生ボランティア活動
活動報告書

2018 年 11 月 28 日 発行

活動学生：埼玉県立大学ボランティア活動支援サークル Solations を中心とした 13 名

発行責任者：埼玉県立大学 新井利民

〒343-8540 埼玉県越谷市三野宮 820

Web: <https://www.to4ta3.com>

Email: arai-toshitami@spu.ac.jp